海外レポート	**インドネシア　ジャカルタ**

「急速に改善されるジャカルタの都市環境（歩道編）」

中川　智明

ハッピーメール 2023 年 9 月号のバス編、11 月号の電車編、2024 年 1 月号の LCC 編に続き、今回はジャカルタの歩道にフォーカスします。

発展著しいインドネシアでは交通機関もそうですが、歩道を含めて都市環境も次々と整備が進んでおります。その変化の激しさについて、日本とは大きく異なり、以下のような印象を持っています。

＜10 年ほど前の歩道の状況＞

私が初めてインドネシアに来た頃、自動車は多く、すでに渋滞も世界最悪と言われていました。車がビュンビュン走っているのですが、その脇に歩道はなく、都市の整備が歩行者を想定していない印象がありました。

実際に、人が歩くスペースが考慮されていないので、走る車の脇を歩く時は、多少の恐怖感がありました。

また、人が歩くスペースにあるマンホールや側溝の蓋なども、信頼を簡単に裏切られ、蓋が落ちて怪我をするようなことがありました。このような状況なので、インドネシアでは常に下を見て歩いていましたし、自分が足場にする場所も常に注意していました。今も足場には注意しています。

この頃は信号も皆無で、車道を渡る時は車の走る中を少しずつ横切るようなことが当たり前とされていました。私は当初これが上手くできず、かつ、怖かったので、現地人について道を渡っていた記憶があります。

＜新しい歩道はシンガポールをイメージ？＞

2017～2018 年頃から、ジャカルタでは道路の整備と同時に歩道の整備が進められました。整備がほぼ完了したと思われる今の状況を見ると、シンガポールの街並みに似ており、実際に「シンガポールのまねをした」という噂もあるほどです。シンガポールは隣の国でありながら、一人あたり GDP で日本を圧倒的に上回る豊かな国ですので、インドネシア人には強い憧れがあるのかもしれません。

＜広々とした歩道の出現＞

あっという間に立派な歩道が出現したのですが、私が驚いたのは、別の点です。依然として世界最悪と言われる大渋滞が発生しているにもかかわらず、渋滞を緩和すべく車道を増やすというよりは、場合によっては車道を減らしてまで、立派なシンガポール風の歩道ができたことに驚きでした。どうやら都市計画をする方には、庶民の思いは届いていないのかもしれないという印象を持ちました。

歩道ができたのも少し前ですが、その後、電車網も機能し始めましたので、徒歩と電車で移動する人も増えてきており、総合的にみて広い歩道の有意義さが増してきました。年々いろいろ変わっており、結果的に「広い歩道で良かった」という印象です。このようなことも、そもそも計画されていたことかもしれませんが、とにかく次から次へと変化があります。

＜自分の事は自分で守るという本能＞

現在でも、私はインドネシアで外を歩く時は下を向いています。まだまだ足場として不適切な場所も多く、医療レベルも日本よりも低いので、怪我をしたくないからです。日本であれば、「歩道の整備は公共サービスだ！役所は何をやっているのだ！」となりそうですが、インドネシアでは良いのか悪いのか、そのようなことを言っている人はあまり目にしません。これまでインフラ整備を政府がやっていなかったからか、政府に苦言を呈するよりも、インドネシア人はとにかく自分の身は自分で守る、ということを徹底しています。政府などがやるべき事は政府に要求する力も必要ではないか、と思うと同時に、インドネシア人のそもそも自分の事は自分で頭を働かせ、人任せ（政府任せ）にせず、自分の判断で危険を回避して自分を守る姿勢は、日本人が学ぶべき点であると思います。

【ジャカルタ中心部の広々とした歩道】